堕楽園

Da Ra Ku En

第 6 回安吾賞受賞記念 特別写真展

2012 年 3/11（日）～ 31（土）

エロトス＝生と死を見つめ続けるアラーキーの最新作 40 点
擬死再生が焼き付けられた印画紙が古町に揺らぐ

11：00 ～ 19：00（最終日は 17：00 まで）
旧北光社 1F（新潟市中央区古町通 6-991） 入場無料

主催：安吾賞市民交流事業実行委員会
協賛：（株）写真弘社／小松屋装飾（株）／環境をサポートする（株）きらめき

Ango
ANGO Awards
新 潟 市

荒木経惟（アラキ ノブヨシ）

アラーキー × 坂口安吾

坂口安吾 撮影：林忠彦

破壊も死も新たな再生のスイッチだと語るアラーキーは、『堕落論』の中で戦後の焼け野原を指して「偉大なる破壊」と書いた安吾との共通点を見出し、この写真展のタイトルを【堕楽園】と命名した。あっぱれなタイトルである。安吾もさぞかし彼岸で「やられた！」と思ってニヤリとしていることであろう。東日本大震災を経て、エロトス＝生と死への感応をアラーキーの写真が物語る。この写真展の初日は、奇しくも震災から 1 年目の 3 月 11 日である。新潟から世界に発信する飛び切りのビジュアルメッセージになるに違いない。

第6回 安吾賞

荒木経惟

あらき・のぶよし
写真家

コトバの人でもある。「天才アラーキー、写狂老人、私写真、墨汁綺譚、包茎亭日乗、冬恋、写真私情主義、写神、陶景、写真心中、エロトス、空事、クルマド・トーキョー、東京ホーシャセン、彼岸…」。いずれも写真集のタイトルだが、本を開くまでもなく読むだけで何かが匂い立ってくる。

天才アラーキーはシャッターは鼓動と同じ、と言う。作品のために撮るのではなく、他者でもなく、同化でもなく、今そこにある「何か」と撞着していく風情である。自分と被写体との間を何度も往還しながら、既成観念から解き放たれてゆく。そこでは世間の規範はキレイに消え去って、アラーキーの画とコトバが誕生し、活き活きと呼吸し始める。その生命力に人々は瑞々しい元気をもらう。アラーキーは二人はいない。

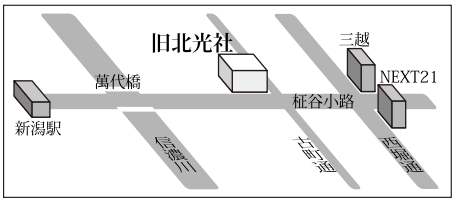
略歴
1940年生まれ。東京三ノ輪（現・東京都台東区）出身。
1963年、カメラマンとして電通に入社。電通を退社後フリーに。1981年、有限会社アラーキー設立。1988年、AaT ROOM開設。
1964年、『さっちん』で第1回太陽賞受賞。1991年第7回東川賞国内作家賞、1994年日本文化デザイン大賞、1999年織部賞など受賞多数。日本のみならず海外でも注目が集まり、多くの美術館やギャラリーで展覧会を行う。2008年には、世界的に活躍する芸術家に贈られる、オーストリアの芸術分野における最高位の勲章「オーストリア科学・芸術勲章」受勲。
主な代表作に、『愛しのチロ』、『センチメンタルな旅、冬の旅』、『東京物語』、『エロトス』、『花曲』、『写真全集全20巻』、『東京ラッキーホール』、『人妻エロス』、『ARAKI by ARAKI』、『チロ愛死』、『写狂老人日記』、『写真夏2011』等、写真集約430冊。

ANGO Awards

第6回安吾賞受賞記念
荒木経惟 特別写真展

随楽園
Da Ra Ku En

2012
3/11(日)～31(土)
11：00～19：00
（最終日は17：00まで）
旧北光社 1F
（新潟市中央区古町通6-991）



坂口安吾年譜

生誕　明治39年（1906）10月20日、新潟市に生まれる。学校に馴染めず、ひとり日本海に面する浜辺に寝ころんで思索した。荒漠たる風と日本海の風景は安吾文学の原風景といえる。

余は偉大なる落伍者となっていつの日か歴史の中によみがえるであろう　大正11年、落第が決定的となり東京の豊山中学3年に編入。この時、新潟中学校の机のふたに「余は偉大なる落伍者となっていつの日か歴史の中によみがえるであろう」と彫ったという。卒業後、下北沢の分教場の代用教員となり自然の中に悪童たちと遊んだ。この頃から求道の厳しさに対する憧れが強まる。

求道者、安吾　大正15年、東洋大学印度哲学倫理学科に入学。悟りを開くため多くの哲学宗教書を読破、睡眠4時間という厳しい修行生活を1年半続け神経衰弱に陥ったが、それを梵語、パーリ語、チベット語、フランス語、ラテン語などを猛然と勉強することにより克服した。

文壇デビュー　昭和6年、『木枯の酒倉から』、『ふるさとに寄する讃歌』、『風博士』を発表、文壇デビューを果たす。失恋の痛手を克服する決意のもと執筆した長編『吹雪物語』は酷評され、安吾は自分に絶望し、転居を繰り返し自らを孤独の淵に置きながら、どん底の淪落の生活を送る。しかし『紫大納言』（S15）、『木々の精、谷の精』（S15）などの新境地をひらく。

小菅刑務所・ドライアイス工場・軍艦に見いだす必然の美　昭和17年、国粋主義の時代、大胆な『日本文化私観』を発表し、伝統文化を鵜呑みにすることの欺瞞を指摘した。

堕ち切ることにより真実の救いを発見せよ
昭和21年、敗戦後の昏迷の中でいち早く戦後の本質を洞察し、4月『堕落論』、6月に『白痴』を発表。この2編は、若者を中心に戦後虚脱していた日本人に強い衝撃を与えた。戦前戦中の倫理観を捨て新たな生き方を指し示す革命的宣言は希望の書となり、『堕落論』によって戦後の日本が再スタートした。昭和22年『風と光と二十の私と』、『桜の森の満開の下』、『不連続殺人事件』、『青鬼の褌を洗う女』を発表。

戦う安吾　昭和25年、『安吾巷談』を連載し、戦後のタブーに挑戦する。昭和26年国税局と税金滞納、差押えをめぐって『負ケラレマセン勝ツマデハ』を発表。税金闘争をひとり戦い抜き、同年9月には競輪不正事件で自転車振興会を相手どり戦う。『夜長姫と耳男』（S27）発表。

急逝　昭和30年（1955）2月17日、古代史の雄大な構想とともに、原風景に由来する創造活動に意欲を燃やしはじめた矢先に、桐生の自宅で脳溢血で急逝した。享年48。

安吾賞

安吾賞とは生きざま賞である

歴代受賞者
第1回　野田 秀樹（劇作家・演出家・俳優）
第2回　野口 健（アルピニスト）
第3回　瀬戸内 寂聴（作家・僧侶）
第4回　渡辺 謙（俳優）
第5回　ドナルド・キーン（日本文学・文化研究者）

【2006年創設】
新潟市ゆかりの作家・坂口安吾は、文学をはじめ多くの分野において何事にも一生懸命に挑み続ける人であった。安吾の精神を具現し、さまざまな分野で挑戦し続けることにより、わたしたち日本人に喝を与えた個人または団体を表彰する【安吾賞】。挑戦者を応援する新潟市は、第6回の受賞者として、写真家の『荒木経惟』氏を選出した。

●問い合わせ：新潟市文化政策課（TEL.025-226-2563）
http://www.city.niigata.jp/info/bunka/ango/
安吾賞　検索

Ango
ANGO Awards